





学位論文審査結果報告書

報告番号	北里大 甲 第1384号	氏 名	小 倉 未 来
論文審査担当者	(主査) 教授 松 原 肇 (副査) 教授 前 田 和 哉 (副査) 教授 竹 下 啓 (副査) 教授 有 田 悦 子	   	
<p>〔論文題目〕</p> <p>ヒューマニティ教育をベースとした薬局薬剤師の研究倫理教育に関する研究</p> <p>〔論文審査結果の要旨〕</p> <p>近年、薬剤師による人を対象とした研究（臨床研究）が推進される様になり、研究倫理教育の重要性が謳われている。ここ数年で臨床研究に関する法律や倫理指針等の整備も進んでいるが、法律や倫理指針を受け身で学習するだけでは研究者としての倫理観の醸成に直結するとは限らず、倫理的な問題に直面した時に研究者自らが適切な判断ができる力を養うための教育が必要である。</p> <p>そこで、小倉未来氏は、医療人としての人間性を醸成するヒューマニティ教育に着目し、薬剤師の学習動機や倫理観を明らかにすることによって、研究倫理への学習意欲を高め倫理的に適切な判断の習得が可能となる教育プログラムの構築および実践を試みている。</p> <p>本論文は「薬局薬剤師の研究倫理に関する探索的研究」と「研究倫理教育プログラムの構築と実践」の二部構成となっている。</p> <p>第1部第1章では、4年制の薬学教育を受けた薬局薬剤師の研究倫理に関する意識調査を行っている。研究倫理教育に関する現状としては、教育機会が少なく学習意欲も低いが、充実した学習内容にすることで学習意欲が向上する可能性が示唆された。本調査において教育心理学の理論である学習意欲に関する7志向(充実、訓練、実用、適応、同調、自尊、報酬)に着目した点はオリジナリティが評価される。</p> <p>更に第2章では、薬局薬剤師の臨床研究における倫理観に関する質的研究を行っている。具体的には、研究倫理のイメージに関する自由記述を質的に分析し、薬局薬剤師が臨床研究を行う際の倫理観の概念化を試み、研究倫理教育プログラムに盛り込むべき倫理的問題を抽出している。臨床研究における倫理に関する薬局薬剤師の様々な視点(＜薬剤師の根底にあるもの＞、＜研究の捉え方＞、＜研究に伴う倫理的問題＞)が明らかになった。＜研究の捉え方＞は、{研究者中心の研究}、{研究対象者/患者中心の研究}、{通常業務に入り込む研究}に分類された。{研究対象者/患者中心の研究}と{通常の仕事に入る研究}は、専門性の誤認識や研究に対する理解不</p>			

足により、意図せず倫理的に[不適切な研究]につながる可能性が示唆された。このことより、薬局薬剤師が研究を実施する際、倫理的に適切な判断ができるようになる教育の必要性を確認している。本章において明らかにされた薬局薬剤師が考える倫理の概念図は非常に新規性が高く、今後の研究倫理教育のみならず医療倫理教育にも寄与するものと評価される。

第1部より、小倉氏は、薬局薬剤師の研究倫理教育に関する現状や臨床研究を行う際に陥りがちな倫理的課題を明らかにした。研究倫理教育に関する現状としては、教育機会が少なく学習意欲も低い、充実した学習内容にすることで学習意欲が向上する可能性が示唆された。また、臨床研究を行う際に陥りがちな倫理的課題としては、専門性の誤認識、つまり研究と医療の違いによる研究対象者との関係性を明確に理解していない状態にあると、意図せず倫理的に不適切な研究につながる可能性を示唆した。よって、薬局薬剤師の現状に合った研究倫理教育としては、陥りがちな倫理的問題を盛り込んだ事例を具体的な教材とし、新たな気づきが得られる参加型教育プログラムを構築する必要性を明確にした。

第1部の現状調査結果を踏まえ、小倉氏は薬局薬剤師が陥りがちな倫理的問題を盛り込んだ事例を具体的な教材とした参加型の研究倫理教育プログラムを構築し、第2部において構築された参加型研究倫理教育プログラムの有用性について検証を試みている。

第2部では、対面形式において研究倫理WSを実施し、その教育効果やプログラム評価を行っている。次に、同じ内容のプログラムをオンライン形式にて実施し、その教育効果やプログラム評価の他、参加者のITリテラシーによる影響も調査している。

第2部より、小倉氏は、参加型学習を用いた本教育プログラムの有用性を明らかにした。また、薬局薬剤師に身近な具体的事例を取り入れたことで、薬剤師の学習意欲向上に寄与したことを示唆した。更に倫理的判断力を醸成するためには、単回ではなく継続的な参加型教育の必要性についても述べている。また本教育プログラムは、対面およびオンライン形式どちらにおいても高い教育効果が得られたことから、本教育プログラムの汎用性の高さも示している。

本教育プログラムは、薬局薬剤師に身近な事例を取り入れたことで研究倫理への学習意欲向上に寄与していた。また対面およびオンライン形式どちらにおいても高い教育効果が得られたことから、本教育プログラムの汎用性が示唆された。ニューノーマル時代の学びのスタイルとしてICTの活用は必然であり、汎用性の高さは今後の研究倫理教育の発展に貢献するものと評価できる。

以上の様に、本論文において小倉氏は、研究倫理教育に関する薬局薬剤師の現状を把握し、薬局薬剤師に適した研究倫理教育プログラムを構築し実践した。

本論文は、薬局薬剤師が人を対象とした研究を実践する上で必要となる倫理的感受性や判断力の醸成を可能とする汎用性の高い教育プログラムを構築したことによって、今後の研究倫理教育の進展に寄与するものと考えられ、小倉氏による本研究は、博士（薬学）の学位に十分値するものと判断し、学位審査を合格と判定した。